

慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	解説
Sub Title	講演録 ヨーロッパ中世史料学から見るドイツ歴史学：回顧と展望： 解説 Vorwort Lecture : Deutsche Geschichtswissenschaft unter dem Gesichtspunkt der mittelalterlichen Diplomatie : Rückblick und Ausblick : Vorwort
Author	岩波, 敦子(Iwanami, Atsuko)
Publisher	三田史学会
Publication year	2010
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.79, No.1/2 (2010. 3) ,p.115- 117
Abstract	
Notes	講演録 ヨーロッパ中世史料学から見るドイツ歴史学：回顧と展望
Genre	Journal Article
URL	http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20100300-0115

ヨーロッパ中世史学から見るドイツ歴史学

—回顧と展望—

【解説】

岩波敦子

ここに訳出した二つの原稿は、二〇〇九年十一月二十一日（土）と二十一日（日）に慶應義塾大学日吉キャンパスにて開催された二つの研究会「二十一日（土）・西欧中世史論研究会（研究代表：岡崎敦九州大学文学部准教授）主催、二十一日（日）・同研究会及び人間文化機構総合推進事業「人間文化研究資料の多元的複眼的比較研究」研究会および国文学研究資料館「東アジアにおけるアーカイブズ資源研究プロジェクト」（研究代表：渡辺浩一総合研究大学院大学教授）共催「中世古文書学（文書形式学）の現在 ドイツと日本— The Diplomats on Medieval Germany and Japan in the process of Renewal」でそれぞれ報告されたものである。

報告者のマーク・メルジオフスキー教授とエレン・ヴィダー教授は、ともに現在ドイツ中世史学界の第一線で活躍する研究者であり、学術誌だけでなく、国際学会、研究会等幅広く積極的に研究成果を発表している。ここで簡単に二人の略歴を記しておく。

メルジオフスキー教授は、一九六三年ヘアフォード生まれ、ドイツ・ミュンスター大学、マールブルク大学、オーストリ

ア・ヴィーン大学にて中・近世史、歴史補助学、芸術史を学んだのち一九九二年ミュンスターで博士号を取得、その後、ミュンスター、パーダーボルン、テュービンゲン大学で教鞭をとり、二〇〇二年ミュンスターで教授資格論文を提出・受理された。ミュンスター大学のほか、二〇〇三年パリの *Ecole Nationale des Chartes* 客員教授、二〇〇六／〇七年シュトゥットガルト大学、二〇〇六／〇七年グラーツ大学で教鞭をとり、二〇〇九年にはインスブルック大学から教授招聘を受けている。二〇〇三年からはドイツ・ミュンヘンに本拠地を置き、十九世紀以来ドイツの中世史料編纂を牽引してきたモニュメンタ・ゲルマニアエ・ヒストリカ研究員として、ハインリヒ七世の証書編纂プロジェクトに携わっている。

メルジオフスキー教授は、その博士論文 (*Die Anfänge territorialer Rechnungslegung im deutschen Nordwesten. Spätmittelalterliche Rechnungen, Verwaltungspraxis, Hof und Territorium, Stuttgart 2000 (Residenzenforschung 9)*) が中世後期の会計記録における行政実践をテーマとしていることから分かるように、その研究重点領域は初期中世から後期中世にまで及び、中でもカロリング朝の証書学、古書体学、とりわけルードヴィヒ敬虔帝の証書に関する緻密な実証研究で知られている。二〇〇二年

ミュンスター大学に提出された教授資格論文 (Privileg und Empfänger. Karolingische Herrscherkunden und politische Kommunikation im Frühmittelalter)「特権と受領者：カロリング期の君主証書と初期中世における政治コミュニケーション」の改訂テキストが、MGHSchriften シリーズ第六十巻として現在出版準備中である (Die Urkunde in der Karolingerzeit. Originale, Urkundenpraxis und politische Kommunikation)「カロリング時代の証書：オリジナル、証書実践、政治コミュニケーション」)。また十九世紀以来ドイツの中世史料編纂を牽引してきたモニュメンタ・ゲルマニアエ・ヒストリカ 研究員として研究組織内からその活動に携わってきたメルジオフスキー教授は、共編著という形で二〇〇三年に開催された展覧会カタログ「テオドル・モムゼンとモニュメンタ・ゲルマニアエ・ヒストリカ」Theodor Mommsen und die Monumenta Germaniae Historica. Katalog zur Ausstellung der Monumenta Germaniae Historica anlässlich des 100. Todestages von Theodor Mommsen am 1. 11. 2003, Konzeption und Kataloggestaltung Arno Menzel-Reuters, Mark Mersowsky und Peter Orth, München 2003 を発表している。研究業績は MGH の HP に up されているので参照されたい。

<http://www.mgh.de/mitarbeiter/mitarbeiter/prof-d-marks-mersowsky/schriftenverzeichnis/>

エレン・ヴィダー教授は、ミュンスター大学で歴史学、地理学、教育学、芸術史を学び、一九八六年カール四世の巡回統治をテーマにミュンスター大学で博士号を取得後、一九八六年か

ら一九八九年まで同大学の特定研究領域二三一「中世の実践的文書化の担い手、領域、形式」プロジェクトの研究員、一九八九年から九五年まで同大学助手を務め、一九九六年同大学に教授資格論文を提出・受理されている。一九九六年以降ミュンスター大学のほか、レーゲンスブルク大学、ベルリン・フンボルト大学で教鞭をとり、一九九七年十月にはテュービンゲン大学中世史担当教授に着任している。

ヴィダー教授の研究重点領域は、後期中世の帝国史、制度史、中世都市史、後期中世の宮廷史、後期中世の行政史等多岐に渡り、その博士論文 (Innen- und Politik. Studien zur Reiseherrschaft Karls IV. südlich der Alpen, 「移動ルートと統治：マルプス以南におけるカール四世の巡回統治に関する研究」Köln 1993) が出版されている。業績リストは以下の URL を参考にされた。

<http://www.mittelalter.uni-tuebingen.de/?q=personen/widder/widder.htm>

二人の博士論文指導教授は、ハンザ史の重鎮ハイントツ・シュトープの後任としてミュンスター大学の比較都市史研究所所長に就任したペーター・ヨハネク教授である。ヨハネク教授は、ヴェルツブルク司教の証書を研究した博士論文 (Die Frühzeit der Siegelkunde im Bistum Würzburg, Würzburg 1969) で高い評価を受けた歴史学者であるが、いわゆる歴史補助学と並んで、後期中世都市史に関する多くの共・編著で知られる。ヨハネク教授自身ヴァイン大学で史料学を学んでおり、師の研究の二つの主軸のうち、歴史補助学をメルジオフスキー教授が、後

期中世都市史研究をヴィダー教授が引き継いだ形となっている。メルジオフスキー教授・ヴィダー教授はご夫婦でもあり、数冊の共著を著してもいる。

二日間にわたる研究会において、メルジオフスキー教授が「カロリング帝国における政治コミュニケーション…文書形式学の視点」と「ドイツ語圏における文書形式学とモニュメンタ・ゲルマニアエ・ヒストリカ」というテーマで、ヴィダー教授が「中世後期の歴史学と文書形式学」と「尚書局長と尚書局…中世後期の文書形式学への新しい接近」というテーマでそれぞれ二回報告した。いずれも個々の研究対象を、研究史と個別研究の両面からマクロ・ミクロ的視点で扱った報告であり、内容的にはここに訳出した、二十一日(土)のヴィダー教授の後期中世の史料研究に関する報告と二十二日(日)のメルジオフスキー教授のドイツにおける文書形式学とモニュメンタ・ゲルマニアエ・ヒストリカにおける研究史を概観する報告が相互に補充し合っているといえる。

モニュメンタ・ゲルマニアエ・ヒストリカのこれまでの研究方針を総括しつつ、ドイツ中世史料学の変遷を概観し、現在進行中の最新の研究プロジェクト情報を伝えるメルジオフスキー教授の報告と、初期中世史料を念頭に進められてきたドイツ文書形式学の手法を、中世後期という未編纂史料が多く残る研究対象時期に適用する危険性を鋭く指摘し、一九七〇年代以降のドイツ後期中世研究の学会動向を踏まえ、尚書局研究の限界と可能性を的確に整理したヴィダー教授の報告を翻訳という形で発表することは、近年日本の西欧中世史研究者の関心と呼び起

こしている史料論研究において、自らが研究対象としている史料の前提を安易に他の史料へ転用しがちな態度に警鐘を鳴らすと同時に、西欧史料学研究の最前線に多角的視座から光を当てるとの異なるに違いない。

一週間の日本滞在中二日間にわたる研究会で、日独両国の史料学の現状と課題に関して、今回の招聘元である渡辺浩一氏(総合研究大学院大学教授)を中心とする日本史の研究者と率直な意見交換ができたことが、両教授にとつても何より大きな収穫だったようである。特に史料学の厳密なテキスト批判の伝統を受け継ぎつつ、メタ文書形式的関心からモノとしての史料も研究の射程に収めるメルジオフスキー教授は、報告者のお一人でもある高橋一樹氏(総合研究大学院大学准教授)の格別のお計らいで、佐倉の国立歴史民俗博物館において貴重な史料をじかに見る機会を得たことを大変喜んでおられた。お二人とも日本とヨーロッパの史料類型の近似性を改めて強く印象付けられ、今後の共同研究の可能性を強調されていた。今回始まった史料学における日独の学際交流が、次のステップへ踏み出す一歩となることを願ってやまない。